《解説》

「イスラエル・アラブ人」によるヘブライ語文学について

細田　和江

二〇世紀初頭から本格化したヨーロッパ・ユダヤ人のパレスチナ移民と、欧米列強の政治的な駆け引きの結果、一九四八年パレスチナの地に「ユダヤ人国家」イスラエルが建国した。その際、当地で暮らしていた多くのアラブ人が土地を追われて難民化した。パレスチナ難民とのちに呼ばれる彼らは、そのとき以来、世界各地に散り散りとなる。しかし、離散を免れイスラエル建国後もそのままとどまることができた一部の人びとは法的地位を与えられて「イスラエル市民」のアラブ人となった。

建国からすでに六十年以上が経ち、学校でのヘブライ語教育や社会生活での必要性から、彼ら「イスラエル・アラブ人」も母語のアラビア語のほかに、イスラエル国家の「国語」であるヘブライ語も同様に使いこなすようになった。ただしこうしたアラブ人でも、文学作品はアラビア語で執筆している。例えば、現代アラブ文学の名作として名高い代表作『非楽観屋サイードの失踪にまつわる奇妙な出来事』（独特の言い回しやさまざまな過去の書物からの引用などが含まれ、翻訳が不可能とも言われた作品であったが、二〇〇五年に山本薫によって精緻な日本語訳が出版された）の作者でイスラエルのアラブ人であったエミール・ハビービー（一九二二-一九九六）は、イスラエルの国会議員も務め、ヘブライ語で論陣をはっていたが、小説の言語としてはアラビア語を用い続けた。同じくアラビア語で詠まれたマフムード・ダルウィーシュ（一九四一-二〇〇八）の数々の詩は、パレスチナ人の抵抗運動に大きな力を与えた。

アラブ人によるヘブライ語での小説は、一九六六年『新たな光のもとで』を発表したアタッラー（アターウッラー）・マンスール（一九三四-）がその先駆けとなり、一九八六年には『アラベスク』のアントン・シャンマース（一九五〇-）がイスラエル国内外で高い評価を受けた。今回訳出した作品の作者、サイイド・カシューアもまた、こうしたヘブライ語で作家活動を行う少数派のアラブ人作家の一人であり、二〇一二年現在もコンスタントに作品を発表し続けている。

サイイド・カシューア(Sayed Kashua)

サイイド・カシューアは一九七五年、イスラエル中部にあるアラブ人の町ティラ（アル=ティーレ）出身で、いわゆる「イスラエル・アラブ人」の三世にあたる。ムスリムの家系に生まれたカシューアは幼い頃から優秀であったため、十五歳のときにティラからエルサレムの寄宿学校であるイスラエル芸術科学院（一九九五年に設立された共学校。生徒はユダヤ人が中心）に送られた。彼のヘブライ語力はユダヤ人とともに教育を受けたこの時期に培われた。エルサレムのヘブライ大学で社会学と哲学を専攻、卒業後はエルサレムの地方紙コル・ハイールなどでフリーのジャーナリストとして活躍する。弱冠二十六歳で第一作目の長編小説『踊るアラブ人』（二〇〇二年）を上梓、イスラエルのムスリムとしては初めてのヘブライ語小説家となった。続けて第二作目『そして夜が明けると』（二〇〇四年）を発表し、彼の作品はイスラエル社会のみならず、欧米諸国での注目をも集めるようになった。

その後カシューアは、ハアレツ紙（イスラエルの日刊紙）の週末版コラムや小説以外にも活動の場を広げた。二〇〇七年からはじまったテレビ番組『アラブのお仕事』は、

カシューアがプロデュースしたコメディ・ドラマで、毎週日曜の十九時からイスラエルの人気チャンネル(チャンネル2)で放映された。この番組はシリーズ化して、二〇一二年には第三シーズンも制作されている。イスラエル市民のアラブ人家族がユダヤ人とともに巻き起こす、さまざまなトラブルを笑いにした番組は大きな反響を呼び、彼はイスラエルで最も著名なアラブ人の一人となった。

二〇一〇年には第三作目『二人称単数』を発表するとまもなく、イスラエルでベストセラーとなり、一躍人気作家の仲間入りを果たしている。

「ヘルツェル真夜中に消える/シンデレラ」について

「ヘルツェル真夜中に消える/シンデレラ」(Hertsl Ne'elam be-Hatsot)は、二〇〇五年ハアレツ紙の新年特集号(イスラエルの新年はユダヤ暦に準じている。年により変動するがたいてい九月から十月の間)に掲載された新聞小説である。ちなみに、ヘブライ語のタイトルは「ヘルツェル真夜中に消える」だが、英語版のハアレツ紙ではその内容から「シンデレラ」に変更されている。一作目、二作目と立て続けに作品を発表したあと、ハアレツの連載コラムやテレビ番組のプロデュースで一躍有名になった彼が、三作目である『二人称単数』の執筆中に発表した本短編は、カシューアの小説の分岐点と見なされている。

匿名のアラブ人が主人公であった前二作とは異なり、本短編では初めて名前をもった主人公が登場する。ただし、その主人公の名ヘルツェル・ハリーワは、ユダヤ人の名「ヘルツェル」とアラブ人の名「ハリーワ」が合わさったちぐはぐな名前である。ユダヤ人ヘルツェル・ハリーワは、生まれながらの性質で、深夜零時になると「シンデレラ」の如くアラブ人に変身してしまう。姿かたちが変わるわけではなく、言語(ヘブライ語からアラビア語へ)や、政治的立場(シオニストからパレスチナのナショナリストへ)、嗜好の変化(アラク[中東アラブ地域に特有な、ブドウなどから作った蒸留酒]、アラブ女性への執着)にその変化が見られる。

主人公を匿名にすることで、「個」の存在として認められないアラブ人を風刺して描いていたカシューアが、本作品では、ユダヤ人とアラブ人をひとりの人間のなかに内包した、お互いに意思疎通が不可能な「異形」な「ヤーヌス(ヤヌス)」を主人公に据えることで、イスラエルのユダヤ人とアラブ人のアンビバレントな感情を表すことを試みた。

カシューアの小説は、一貫して平易なヘブライ語の口語体で書かれているため、批評家からの評価はそれほど高くない。たしかに第一作目は文体に稚拙な部分が多く、レトリックなど文学的な技法をこらした作品ではない。しかし、二作目、三作目と作品の構造や表現には成長が見られ、物語のプロットも工夫されつつある。まだ三〇代半ばのカシューアは発展途上の作家といえる。

本作品は若き作家の、表現者としての成長と、イスラエル社会でのアラブ人の若者のありかたとその葛藤を私たちにかいま見せてくれているのである。